

### 3月総評

西躰かずよし

せーのでとんだ  
あいつだけ落ちた

早川 のり 東京都

透徹した眼差しで残酷さを含む事実を描いているようにも見える。問題は、何故、詠み手がそうした事実を切り取る必要があったかで、そこに思いをめぐらすとき、痛みにも似た感情が浮かぶ。石原吉郎の詩、「ゆうやけぐるみのうた」が思い起こされる。なお、この作者のほかの作品には「小松菜のおひたしみたいな雨」というのがある。

どうしても内から零せぬ泥があり  
針を通すかケモノは ぼくらは

Im 沖縄県

すりつぶす蛍光灯のこどもたち  
最小単位の星になるまで

Im 沖縄県

言葉にならない苛立ちのようなものを表現しようとしているようにも感じられる。それが作品の端々、たとえば、「針を通すかケモノは」や、「すりつぶす蛍光灯」という一節に表わされる。ここでは、針を通すという行為も、すりつぶすという行為も、事態の解決に向かうものとして描かれてはいないように見える。

言い訳のようにレモンを一つ買う

五味 はこ 神奈川県

連翹に呼ばれてひとつ前の角

五味 はこ 神奈川県

春の雹行かないでって言ったのに

五味 はこ 神奈川県

読み手は主人公が実感を詠っているものと感じる。それは作者が、読み手にそう伝わるように、きちんと情景を言葉として表しているからだと思う。言い訳にレモンを買ったことや、連翹に呼ばれてひとつ前の角まで来てしまったこと。だからだろう、誰もがそんなことがあったような気にさせられるのである。

魚がぼくを見るから食べられない  
とフライを指差した竹内君を  
きれい  
と思った

春町 美月 大阪府

竹内君のやさしさのなかにある欺瞞を見るから、主人公は彼をきれいと思ったのだろうけれども、それはきっと、自身が魚フライを食べることのいやらしさを正当化できないことと合わせ鏡でもあるのだろう。

遺失物係の椅子の夏蜜柑

まちりこ 埼玉県

内職のダンボール箱で埋まる部屋  
母は何度も正の字を書く

まちりこ 埼玉県

この作者の書く作品からは、実体験が描かれているような印象を受けるが、それは作者の細部をとらえるまなざしに由来するだろう。本来は誰かがいるはずの遺失物係の椅子に置かれた夏蜜柑や、ダンボールに埋まっていく母の姿が、読み手にもありありと迫ってくるのである。

雑居ビルの屋上にある

夏休み

氷丸 茨城県

雑居という説明の言葉が必要かどうかは判断が分かれるところだが、ビルの屋上にある夏休みというのはどんなものなのかとても気になる。近くて遠いところ、夏休みはそんなところに転がっているのかもしれない。

夏の影背比べして誇らしげ

夜 東京都

三百年後の彗星はわたしかも

夜 東京都

作者は「彗星」や「夏の影」とも友だちになれるのだと思う。それは、ほかの人よりかなしみを余分に背負うことになるかもしれないけれども、楽しさも余分に持つことができるのかもしれない。

飛行機に乗ってるときの心臓が  
あおむらさきだかちんこちんだ

藤ほたる 神奈川県

敢えてそのまま書くことで成功した作品。口語ならではの良さが出ている。そのまま書いた作品というので思い出される俳句に、橋本夢道の「うごけば、寒い」がある。

告白のたまごやきです花見です

藤田 ゆきまち 三重県

がむしゃらに  
ケンタのチキン  
春休み

藤田 ゆきまち 三重県

たまごやきと花見、ケンタッキーと春休み、いずれもありふれた組み合わせだけれども、「告白のたまごやき」、「がむしゃらに／ケンタのチキン」となると、俄然楽しくなる。定型を用いながらキャッチコピーの方法も取り入れたような表現がここにある。

じんせいを  
ちょっとあきらめたら  
せかいが  
ちょっとだけきれい

小井 詩文 京都府

仏教用語で諦念というのがあるが、それは諦めるというより、事実をそのまま受け入れるというものだと思う。「ちょっと」という表現に惹かれるのは、完全にあきらめきれないところにこそ、人間の存在を見るからに他ならない。